



## 第三者のコメント



東京大学農学部長

しょうげんじ しんいち  
生源寺 眞一氏

「私たちだからできるCSRがあります」。初回の2008年報告から使われている味わい深い表現である。「私たち」にはふたつの意味が込められていると思う。ひとつは、農林中央金庫が農林水産業の協同組織の中央機関として、非常にユニークな業態のもとにある点だ。この特徴から、会員への貢献、農林水産業への貢献、そして社会への貢献という重層的なCSRの構図が生まれている。CSRの取り組み自体、現場の協同組織との連携のもとで進められているケースが少なくない。

「私たち」のもうひとつの意味は、農林中央金庫の基盤である農林水産業が、地域の健全な資源・環境とともに歩む産業であり、農山漁村の暮らしを支える営みでもあることだ。この意味で農林中央金庫の業務は、資源・環境の保全やコミュニティの維持に深く関わっており、それ自体が社会貢献の側面を有している。事実、本来の業務の一部がCSR活動に含まれている点に農林中央金庫の特色がある。さらに付け加えるならば、農林水産業と人を教育する活動には、生命体を育むという意味で共通点が多い。

報告書はまず、農業・水産業・林業のそれぞれの分野への貢献として、CSRの活動を紹介している。このパートは、インタビューを織り込んだ現地Reportが充実しており、貢献の内容を具体的にイメージしやすい。協同組織を中心とするCSR活動の連携パートナーとのコミュニケーションを深めるうえでも、効果的なスタイルであろう。なお、農林水産業への貢献をCSRと位置づけることは結構であるが、加えて、そのうち先駆的でモデル的な

役割を担う活動については、フロンティア拡大型のCSRとしてとくに高く評価されてしかるべきであろう。例えば、アグリ・エコファンドからの投資や森林再生基金による助成などである。

報告書はさらに、農林中央金庫グループのCSRの活動を地域・社会貢献、環境・自然保護、教育・研究支援のジャンルに区分して紹介している。レイズドベッドの寄贈、体験実習を含んだ寄付講座の活動、海外支店の取り組みなど、農林中央金庫の特色がよく出ている。コミュニティ・環境・教育の3つの領域は、農林水産業に基盤を持つ組織のCSR活動として実に自然である。「私たちだからできるCSR」なのである。この点では、上述の農林水産業への貢献を紹介したパートにも、これら3つの領域で印象的な活動が少なくなかった。私自身、漁船海難遺児育英会の活動をはじめて知ることができた。

この報告書は3回目であるが、昨年度以降のCSR活動は農林中央金庫にとって特別の意味を帯びている。新たな経営戦略として「経営安定化計画」が策定され、農林水産金融の一層の強化が掲げられたからである。だからこそ、CSRの活動は本来業務と不可分のものとして位置づけられている。改革の姿勢を風化させないためにも、「経営安定化計画」のもとでのCSRであることを肝に銘じておく必要がある。なによりも、報告書を農林中央金庫グループの役職員の皆さんに熟読していただきたい。CSRの報告は社会に向けて発信されると同時に、組織がみずからのポジションとミッションを自己確認するための素材でもある。